

# 整形外科分野に於ける「自虐的世話役」の問題点

## Problem of "masochistic caretaker" in orthopedic field

本間 毅

Honma Takeshi

(猫山宮尾病院 リハビリテーション科)

(Nekoyama Miyao Hosp. the Depart. of Rehabilitation)

Keywords: Masochistic caretaker, Nursing, Discharge support

### 目的

自らを傷つけてまで他者の利益を優先するパーソナリティーを「自虐的世話役」(北山 2010)と呼ぶ。他者の世話をやり過ぎて患者になり、介護の問題から抜け出せなくなる理由と、それに対応する方法を明らかにしたい。

### 方法

個人情報を変更した3症例から、整形外科分野に於ける「自虐的世話役」の問題点を検討する。

### 症例と経過

Xさんは10年前に人工膝関節手術を受けた80代の女性で、施設から外泊した障害者の娘さんを介護中に人工膝の直上で大腿骨を骨折した。Xさんの受傷前までの整形外科的評価は満点であったが、複数の抗うつ薬と睡眠導入剤を服用していた。私は骨癒合を促進させる薬物療法と施設の利用を提案し、娘さんの外泊を見直すよう障害者施設に依頼した。骨折の手術とリハビリを受け、3ヶ月後に施設へ入所したXさんは、娘さんの介護という生き甲斐をなくし、認知機能が低下して無気力状態に陥った。

Yさんは50代の女性で、慢性腰痛と倦怠感を主訴に当科を受診した。Yさん一家は、数年前から要介護状態の両親を昼夜交替で介護していた。お父さんはショートステイへ、お母さんは当院へ入院してもらったが、Yさん一家に十分なレスパイトケアはできなかった。中井(2011)は「外傷による記憶は薄らいで修正されることはなく、時には強化されながら繰り返されるので、自己防衛のために解離と言う心理機制が選択されることがある」と述べているが、患者と介護者の心の変化は、繰り返される心身の外傷に起因すると理解できないだろうか。

Zさんは奥さんを癌、お子さんを難病と癌で亡くすまで30年間介護を続けた80代の男性である。家族の介護という役割を終え、酒を飲みヘルパーやケアマネを門前払いにして引きこもっていたが、腰痛で救急要

請と入退院を繰り返した。検査や治療は拒み、死を望みながら生き続けることを余儀無くされたZさんには、矜持を保てる生活の場を提供する事が医療に優先すると判断し、私は保健師とケアマネに協力を仰ぎ治療を中止した。

### 考察

病的な方から普通のお母さんまでが自虐的世話役という表現形をとる(北山 2012)。しかし周囲に自虐的世話役劇を「読み取る力量」(Charon 2011)が不足していると‘困った人’や‘不適切な依存・共依存’と切り捨てられる事がある。彼らに対し思いきった対応を行なう場合、生き甲斐や死生観(川島 2011)を尊重できる母性的環境を維持することが重要である。専門分野の手法や用語で、対象の身体どころか心まで論理的かつ客観的に表現できると思ひ、急ぎ解答を出してはいけない(名取 2012)。医療者と患者や家族は、交代可能な役割に過ぎないと自覚し、自虐的世話役と自分に生じている困惑は困惑として受け入れることが問題解決の糸口になる。

### 引用文献

- 北山 修(2010)「劇的な精神分析入門」. みすず書房, P280-281.  
北山 修(2012)「幻滅論」. みすず書房, P179.  
中井久夫(2011)「徴候・記憶・外傷」. みすず書房, P161-178.  
川島大輔(2011)「生涯発達における死の意味づけと宗教」. ナカニシヤ出版, P142.  
CHARON,R. (2011) *Narrative Medicine.Honoring the Stories of Illness*. 斎藤清二ら訳. OXFORD UNIVERSITY PRESS, 医学書院.  
名取琢自(2012)「こころに耳を傾けるために—ジェイムズ・ヒルマンのリテラリズム批判を手がかりにして、『心理臨床の広がり」と深まり(山中康裕 編)』. 遠見書房,P67-84.